



作 古田 足日
イラスト 佐々木 若葉

ある日、たけしと、おとなりの
ようこは、おかあさんがすてようと
したダンボールばこで、ロボットを
つくることにしました。

たけし

「そうだ、ようこちゃん、
ふたりのはこをあわせたら、

ロボットができるよ」
ようこ

「ほんとだ。そうしよう。
せかいーりっばな
ロボットをつくろうよ」

そうして、ふたりは

ロボットをつくら

はじめました。



ようごがかいたロボットのかおは、
なっているようなかおでした。

ようご

「どうしよう。なきむし

ロボットになっちゃったわ」

たけし

「ういよ、ういよ。じゃあ、

なみだのもとをいれておこう」

いよいよロボットができあがり

ました。

たけし

「かみのはごでつくったロボット

だから、なまえはカミイにしよう」

ようご

「さんせい。きみはロボット・

カミイなのよ。へんじしろ」

と、ようごがロボットにいうと、

ロボットはほんとうにへんじを
しました。



(クルクル、ポコン、キコン)

カミイ

「いいい、だ。ぼくは、

ひとにぼくのなまえを

おしえてもらおうほど、

ばかじゃないよ」

カミイはそういうと、

はしりだし、そとへ

とびだしました。

たけしとようこは、

あわてておいかけます。

たけし

「うわあ。なきむし

ロボットじゃなくて、

いばりんぼロボットだ」



たけし

「はあ、はあ、はあ…」

はらっぱまでいくと、

カミイが小さいおんなの子を

なかせていました。

おんなの子

「えーん。わるいロボットが、

わたしのちびゾウをとって

いったあ」

たけし

「こら、カミイ。

ちびゾウをかえしてやれ」

カミイ

「いやだよ。えい！」

(ドスン！ ガラガラ〜)

たけし

「うててて」



カミイ

へ♪ぼくはロボット。

せかい一つよい

ロボットだ。

わるい子なんか、

かた手でひよいと

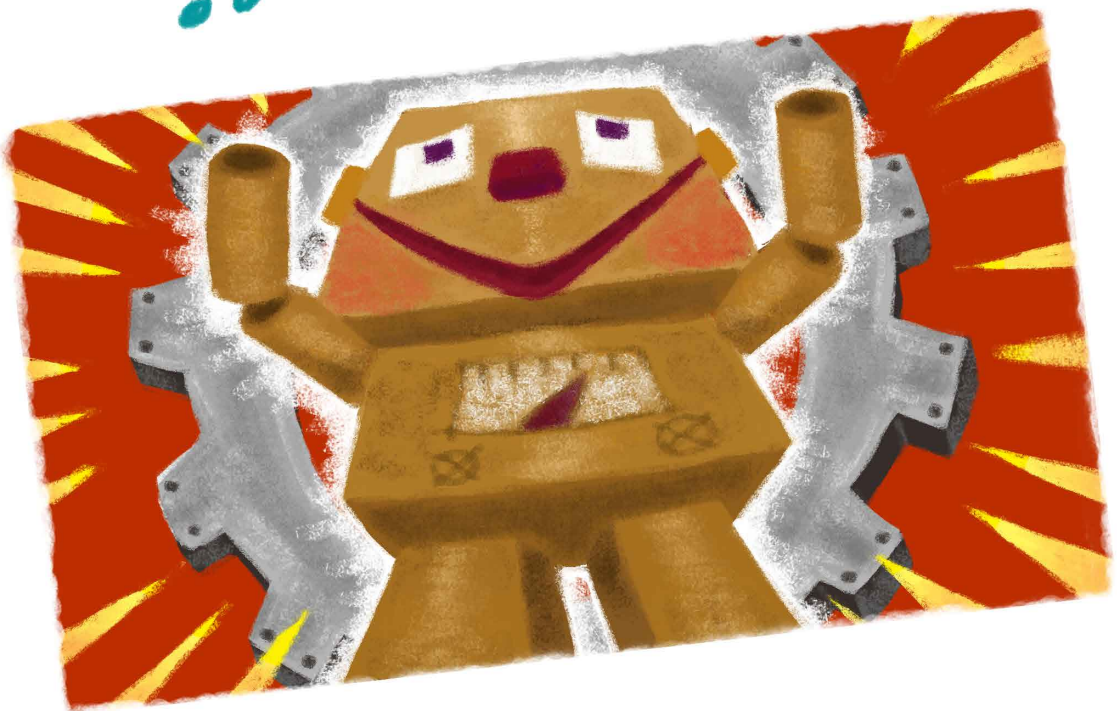
つきとばすく

と、はしりだした

カミイでしたが…

水たまりに足をつっこんで

しまいました。



カミイ

「うわあ、水みずはいやだ。

うえーん。ぼくも、

ちびゾウがほしいよう」

ビーだまぐらいの

なみだのつぶが、

カミイのからだを、

どンドンぬらして

いきます。

ようこ

「たいへんだ。これじゃ、

カミイはこわれて

しまうわ」

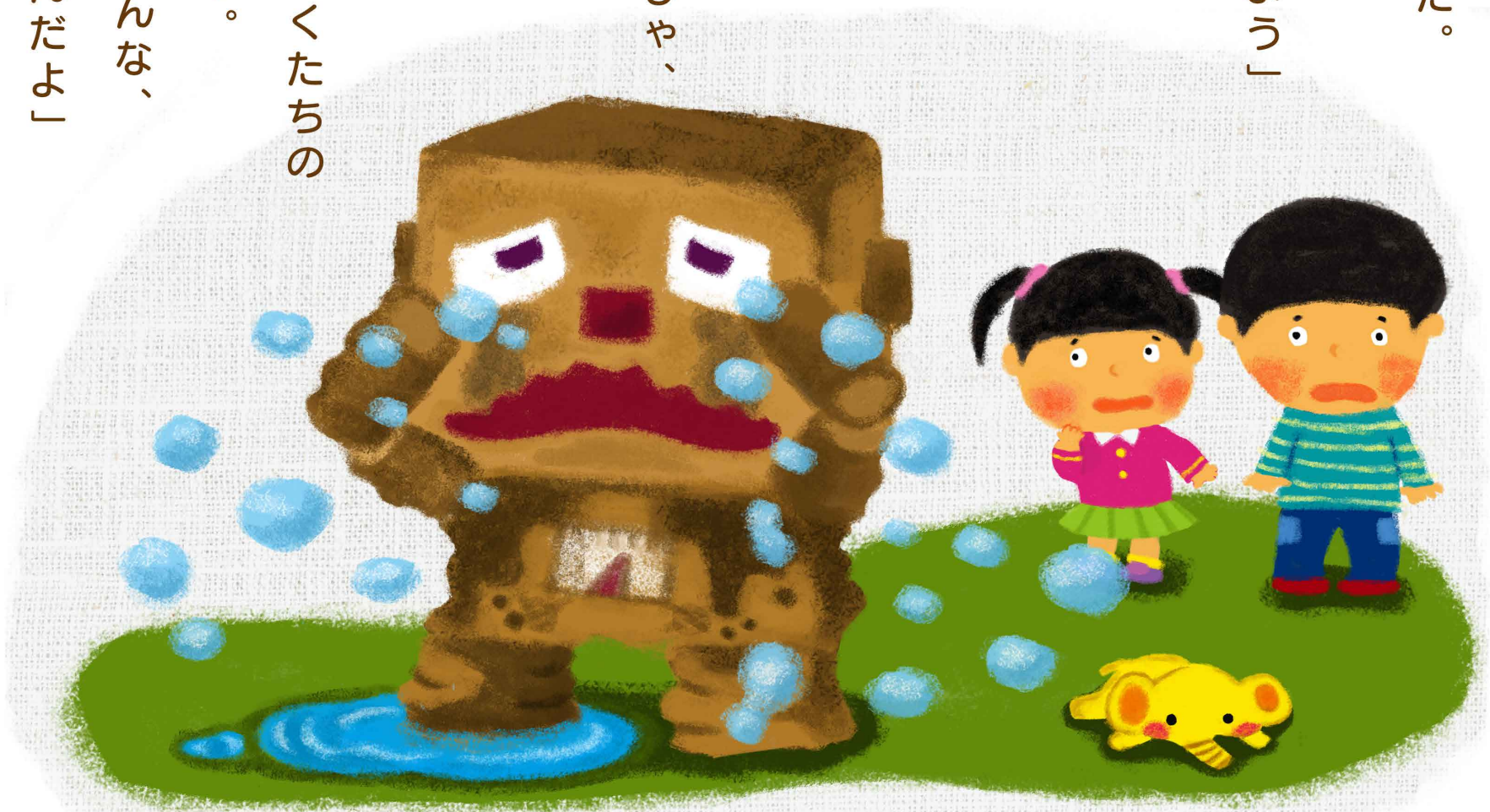
たけし

「そうだ、カミイ。ぼくたちの

ようちえんへいこう。

ようちえんじゃ、みんな、

ちびゾウをつくるんだよ」



つぎの日、

たけしとようこは、カミイを

つれてようちえんへいきました。

ももぐみのみんなは、カミイの

ために、おりがみのちびゾウを

つくってくれたのですが…。



かずお

「これ、あげるよ」

カミイ

「なあんだ、これ、

ぜんぶ、ちびゾウじゃ

ないじゃないか」

かずお

「ちえっ。せっかく

つくってやったのに。

カミイなんかきらいだよ。

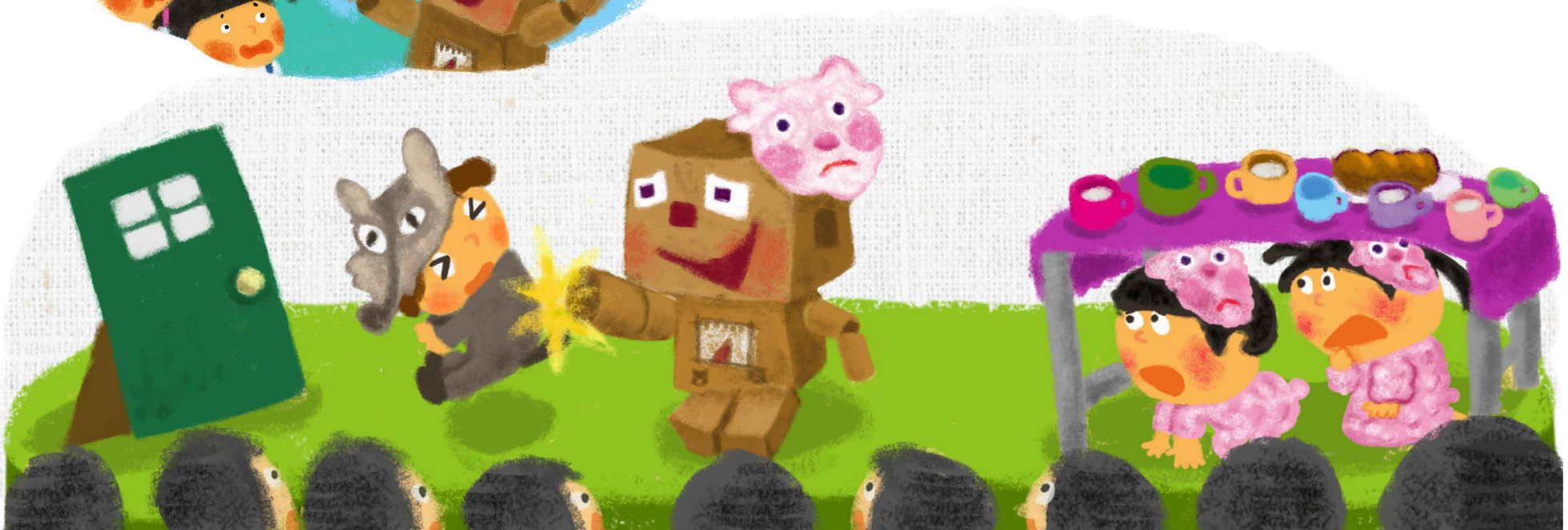
そとであそぼ」



おんなのこ

「カミイがわたしのいえ、
こわしちゃった！」

その日^ひから、カミイは
いたずらばっかりする
ので、たけしもようこも
こまってしまいました。



まゆみ

「カミイみたいにな

じぶんかってな子は、

ようちえんにこない

ほうが、いいわ」

たけしはあわてていいました。

たけし

「ちょっとまって。ね、カミイも

ようちえんにきたいんだから、

ひとりグループにしたら?」

カミイ

「ひとりグループでいいからね。

ひとりのほうがせいせいするよ」





「いらっしやう」

「これ、ちようだあい」

「はい、三百五十円さんひゃくごじゅうえんでえす」

きようは、ようちえんで

おみせやささんごっこを

する日ひです。みんなのみせは

しなものもいっぱい、

だいはんじょうなのに、

ひとりグループになった

カミイは、ひとりぼっちで、

でんきやをしています。

カミイ

「ぼくのみせにも、テレビと

でんきスタンドが

ありますよう」

おんなの子^こ

「あ、ここもおみせだったのね。

かざりが無いから、おみせじゃ

ないと、おもったわ。」

おとこの子^こ

「うるもの、たった

二つ^{ふた}しかないの？」

カミイ

「う、うん」

おとこの子^こ

「あ、あっちのでんきやの

テレビのほうがほんもの

みたいでいいよ」

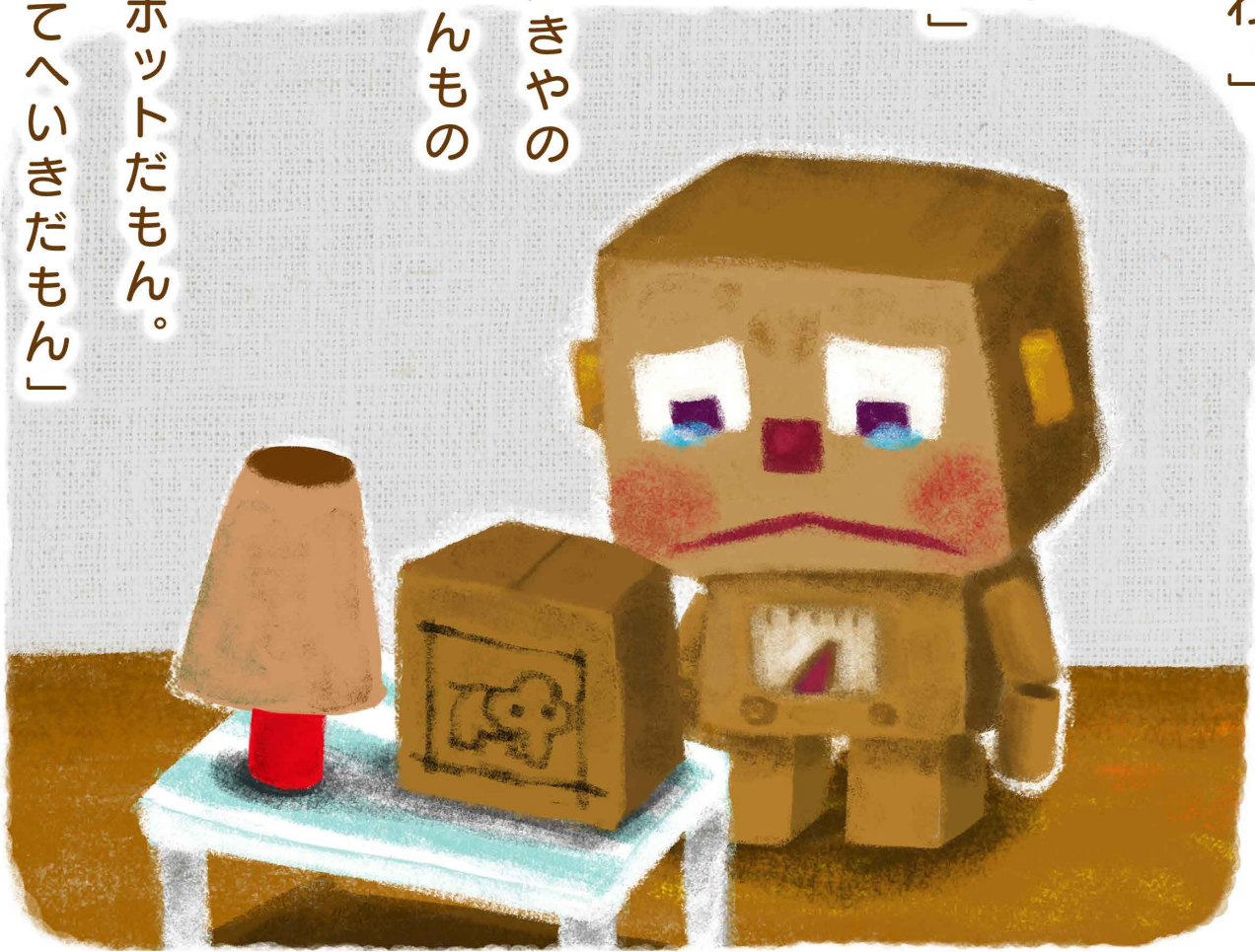
カミイ

「ぼくはつよいロボットだもん。

ひとりぼっちだっけいきだもん」

そこへ、さっきのおとこの子^こが

かけこんできました。



おとこの子^こ

「ぼく、やっぱり、

じいこのテレビかうよ。」

カミイ

「ありがとう」

へ♪ぼくはロボット。

ひとりぼっちじゃないんだよ。

ぼくのテレビはすぐうれる。

ひとりグループだってへいきだよ

その日^ひ、ももぐみはみんな
そろって、のはらへいくことに
なりました。そのとちゅう、
大きなみちのあおしんごうを
わたろうとした、そのとき…。



(ブウウウウンー!)

先生 せんせい

「あぶない!」

まゆみ

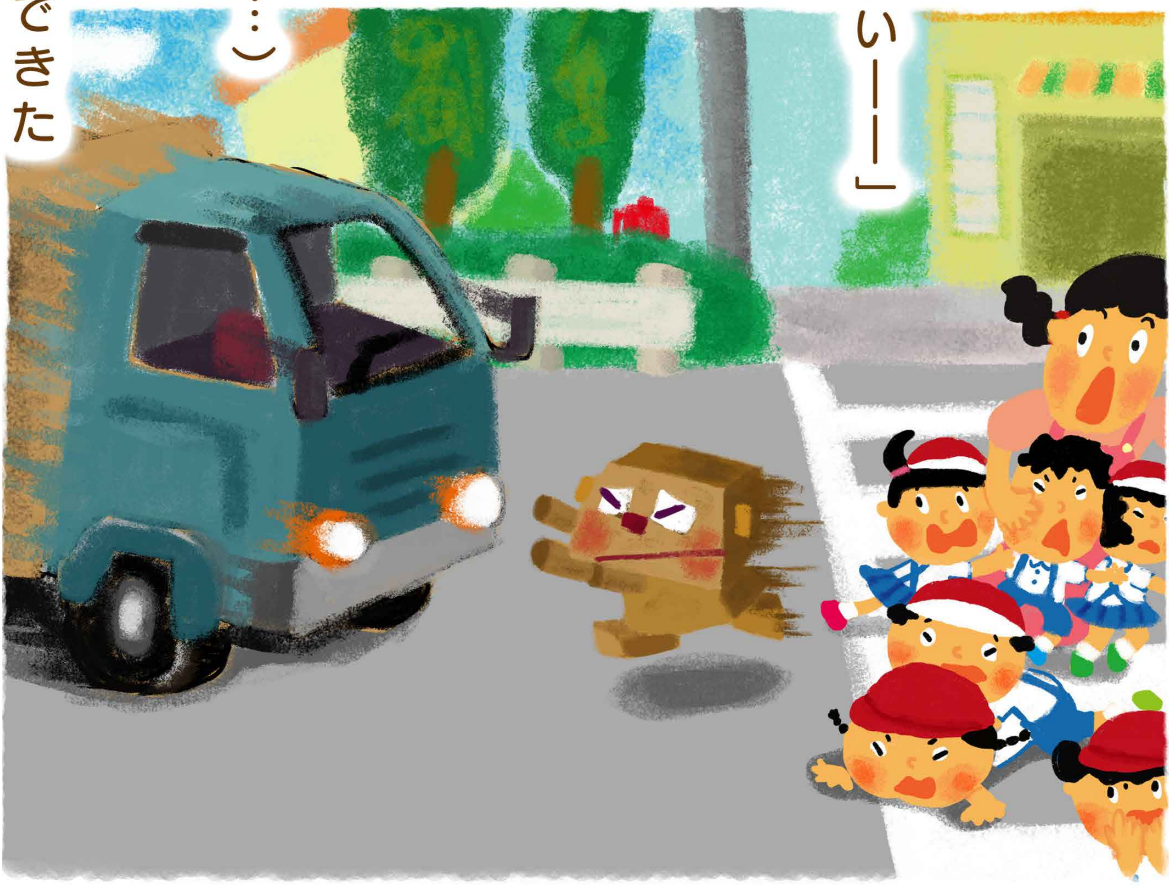
「キャー!」

カミイ

「ぼくはせかい いち 一っよい——」

みんな

「カミイ!」



(ガ、ガ、ガ、ガア、ギイ…)

子どもたちにつっこんできた

しんごうむしのダンプカーは

とまりました。でも、ダンプカーの

まえにとびだしたカミイは…。

先生 せんせい

「カミイはしんだのよ」

ようちえんに先生が せんせい

つれてかえってきた

カミイは、ダンプカーに

ひかれて、ペしゃんこに

なっていました。

みんな

「しく、しく…うう」

まゆみ

「きょう、カミイがダンプカーを

とめてくれなかったら、わたし、

きつとしんでいたわ」

じろう

「カミイのおそうしきをしようよ」

かずお

「そうだ、カミイに、ちびソウを

つくってやろう」



たけしとようこは、ペしゃんこに
なったカミイを、なおしはじめました。

ようこ

「これ、なみだのもとだわ」

なおしてもらったカミイは、ただ
ねむっているように見え^みました。

たけし

「カミイ…」



すると、とつぜん…！

カミイがおきあがりました。

みんな

「カミイ！」

カミイ

「あ、ちびゾウだ！」

カミイの目には、なみだの

つぶがうかんで、きらり

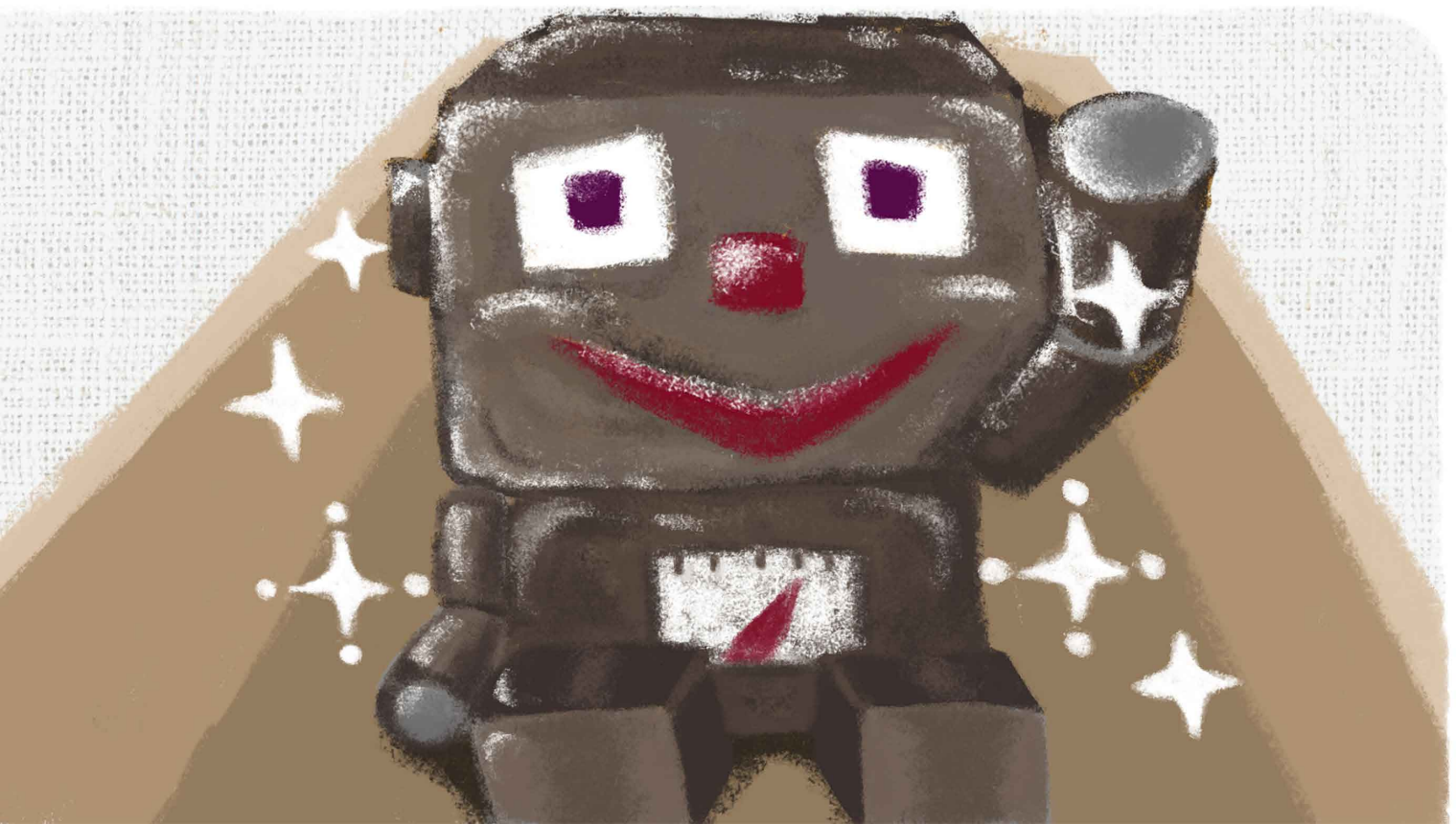
きらりとひかりました。

そして、かみのカミイの

からだは、こうてつせいの

ピッカピッカになって

いました。



カミイ

「うごけ、ちびゾウ！」

ほく、ロボットのくに入

かえるんだ。ロボットたちに

ちびゾウをもってかえって

やるんだよ。さよならあ」

みんな

「さよならあ」

みんな

「さよならあ」

たけしはさけびました。

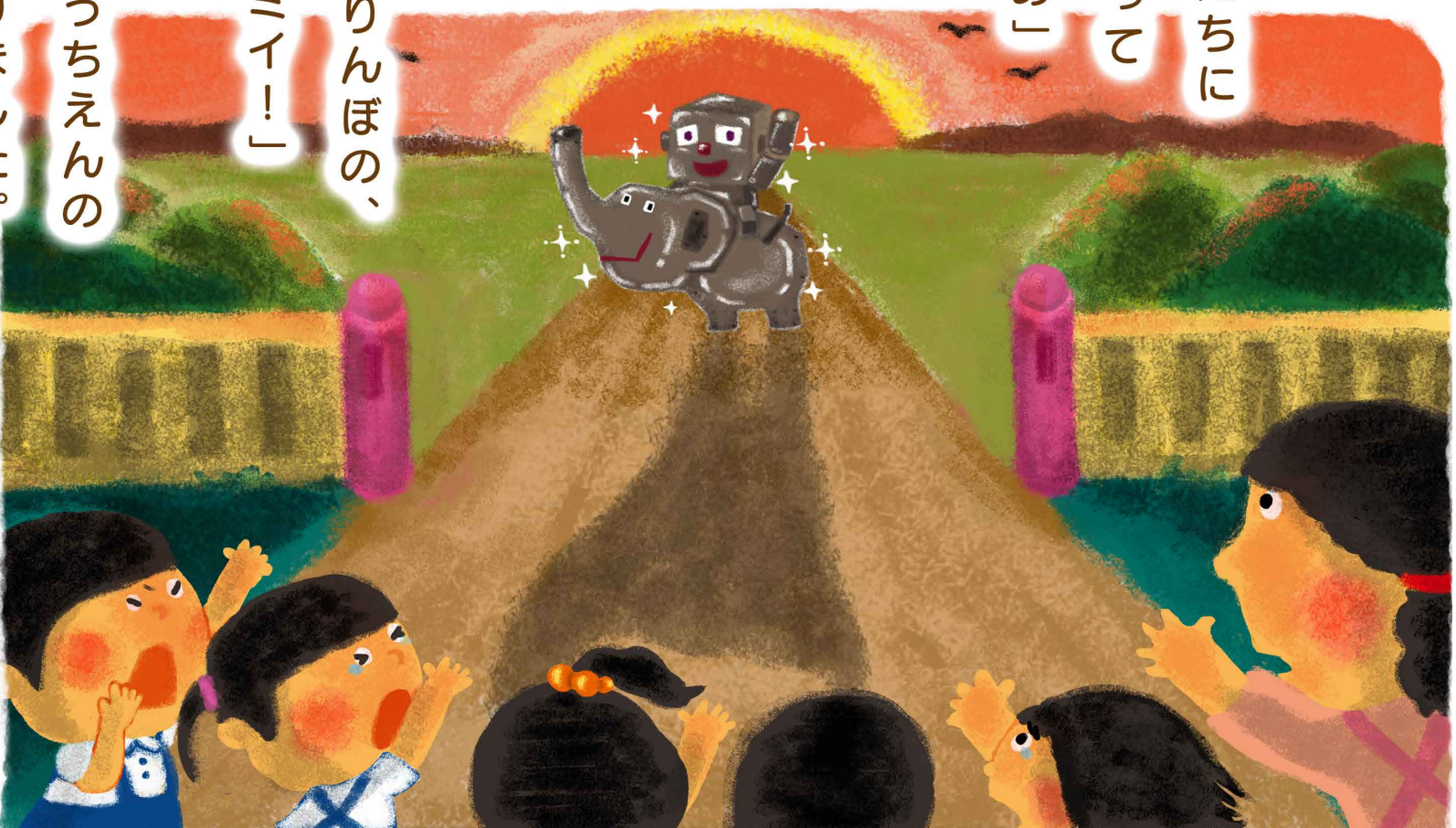
たけし

「わからんちんの、いばりんぼの、

なきむしロボットのカミイ！」

カミイとちびゾウは、ようちえんの

もんをでて、見え^みなくなりました。



ようこ

「さよならあ、カミイ！」
たけし

「さよならあ、カミイ！」
すると、とおくから
かすかに、カミイの
でたらめうたが、また
きこえてきました。

へ♪ぼくはロボット。
ひとりじゃないよ。
ひとりだったら、
おみせやごっこも
できないもん。
いいしなものも
できないもんく



おわり

